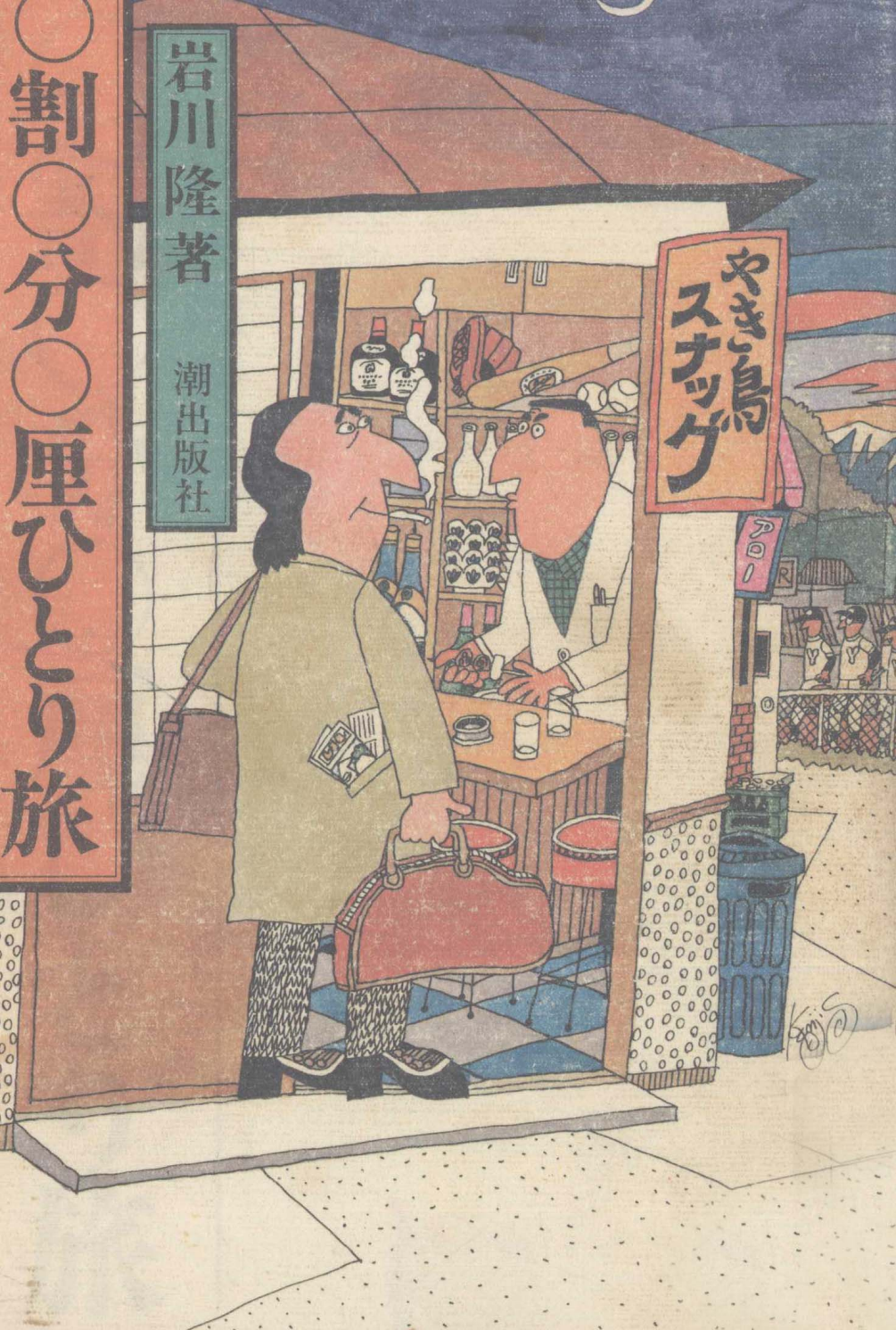
○割○分○厘ひとり旅

岩川隆 著

潮出版社



○割○分○厘

厘ひとり旅

岩川隆著

潮出版社

0割0分0厘ひとり旅　1200円

昭和55年4月15日　初版

著者　岩川　隆

発行者　富岡勇吉

〒102　東京都千代田区飯田橋3の1の3

発行所　株式会社　潮出版社

電話（230）0781（編集）　振替東京5-61090
（230）0741（販売）

印刷・第一印刷　付物・栗田印刷　製本・鈴木製本所

落丁・乱丁本はお取替えいたします。販売窓口あて御郵送下さい。
本書の内容の一部あるいは全部を無断で複写複製（コピー）することは，法律で認められた場合を除き，著作者および出版社の権利の侵害となりますので，その場合には予め小社あて許諾を求めて下さい。

© T. Iwakawa, 1980 Printed in Japan

目次

舞踏会の手帖（北海道）……5
スクラップ・ブック（北海道）……33
吉四六話（きつちよむばなし）（九州）……77
トラハゼ（四国）……127
コバミの手（東北）……159

裝幀　佐々木侃司

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

0割0分0厘ひとり旅

舞踏会の手帖

北海道

その頃私は、人並みでない、おかしな毎日を繰り返していた。

東京の郊外・狛江市にある八階建てのマンションの、白い壁に囲まれた部屋の中で、昼も夜も、一時間机の前にかじりついていたかと思うと十分間は転って眼を瞑り、二時間も仕事を続けるとそのあとは三十分間眠るといったぐあいであった。というのも強度の神経性胃潰瘍のためで、不思議なことに、気にそまぬ仕事を前にするとてきめんに胃袋は両手で絞るような痛みに襲われる。気分のいい仕事だ、と頭を納得させても胃袋だけは純情素朴、頑固に反撥する。そのうちに激痛は間隔を置かずにやってきて、机から離れるよう要求する。やむを得ずよこたわって瞼を閉じると、しだいに痛みは遠

ざかってゆく。仕事をやめればいいのだ。しかし、ひとはみな働かなければ生きてゆけない。

『巨人軍栄光の四十年』(報知新聞社刊)というグラフ雑誌を見たのはそんなときであった。

私は、つかの間寝ころがってめくっているうちに、ぼんやりと、巻末の〈巨人軍 在籍選手通算成績〉と名づけられた一覧表を眺めていた。なんと厖大な数であることか。小さな活字でアイウエオ順にぎっしり組まれたなかには、スタルヒンもいる、沢村栄治もいる、そして長島茂雄もいる。昭和九年の末の創立のときから現在まで、公式戦に出場した選手の名と成績の数字が並んでいた。

知っている選手もあれば、知らないのもある。いや、殆どは聞いたこともない名である。〈試合数〉〈打数〉〈得点〉〈安打〉〈二塁打〉〈三塁打〉〈本塁打〉〈打点〉〈盗塁〉〈四死球〉〈三振〉〈失策〉〈打率〉とあって、数字の多いのも少ないのもある。四桁におよぶようなのは、おそらく、その時代のスターであったのにちがいない。私は、しかし、なにげなく、〈打率〉を見ていて、〈・000〉とある数字に惹かれた。いや、惹かれたというよりは、なぜか切ないような、ほっとしたような思いにとらわれた。ゼロの羅列は、数字といえるだろうか。

——打率・0割0分0厘。

そういう人生もあるのか。あって不思議はない。私自身もまた、たぶん、〈終身打率・000〉であろう。私はそのとき、ゼロという数字に励まされたような気になり、ふたたび胃のあたりをおさえながら、机の前にもどった。それっきり、しばらくは、一覧表のことも選手成績のことも忘れて、働いた。

「旅に出ませんか」

と、ネムトラ君がいってきたのは、それから二か月後、秋風が立ち始めた九月中旬であった。ネムトラ君は、「こんな白い壁の中にいては、ダメになりますよ」という。もうダメになっている、といおうとしたら、かれは口の中でにゃむにゃむとなにごとか呟いた。問い返すと、早口で、

「いろんな人に会ったほうがいいですよ、自閉症になりますよ。なんでしたら、私も旅に同行します」

と言った。

余談になるが、ネムトラ君は大学を卒業してまだ三年目のU出版社の若き社員である。二十七、八なのに大人の風貌があり、実際に近頃はかなり肥ってきた。底に穴のあいた靴や、ボタンがひとつしかかけられぬ小さなコートを羽織って平然としており、粘り強く、暢気な性分かと思うと意外にそそっかしく、感情を露骨にあらわさないが繊細なところもある。いつだったか、四柱推命学の大家に診断してもらったら、きみは〝眠れる虎〟だといわれたそうだ。言い得て妙といおうか。いつまで眠っているのだろうと訊くと、「四十五歳の頃、目を覚まして吠えるらしいです。吠えたあとはどうなるのかいってくれませんでした」と、嬉しいような、残念なような顔で話した。マンボウのほうが似つかわしいような気もするが、トラといわれたのは、なによりめでたい。以来、私はひそかにかれのことをネムトラと呼ぶことに決めた。四十五で目を覚ますとは、かれもまた〈・000〉の種族の一人なのかもしれない。ネムトラ君から旅をそそのかされたとき、私はふと、『巨人軍栄光の四十年』の

ことを思い出し、
「ゼロの人たちに会ってみたい」
と口走った。
「そうですよ。ゼロからの出発です」
とネムトラ君がいう。私は、ともかくもうこれ以上、胃袋の責め苦には耐えられないと思った。

十一月八日、水曜日。午後三時頃、茶色のショルダーバッグの中に、洗面用具、カメラ、ノート、下着類を詰め込んでいるところへ、ネムトラ君が、急に関西出張を命じられて同行できない、と電話してきた。私は独り旅を覚悟した。
「北海道は、もう雪らしいわよ」
と女房がオーバーを着てゆくようすすめたが、皮ジャンパーとブーツの恰好で出立することにした。
南武線から川崎に出て、羽田に着くと、71便・午後五時三十五分発の全日空機札幌行に間に合った。窓際の席に坐って暗い下方を見おろすと、町の灯が点々と闇を彩っている。札幌に着いたら、まず何を食べようと私は思った。イカ、ウニ、北寄貝、カニ、いずれもシュンを迎えるときである。千歳空港に到着したのは午後七時すぎであった。想像していたより、ずっと暖かい。空港から五百円のバスに乗って、灯ひとつない暗闇の中を札幌に向かって走るうちに、私はようやく、旅の実感をおぼえ始

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

めていた。

駅前のホテルに予約をすませ、ススキノの飲み屋でイカと北寄貝を肴にして地酒を飲んだあと、ふたたびホテルに帰って、その夜はぐっすり眠った。胃の痛みがいつのまにか消えている。独り旅はいい気分のときもあるが、やはり相手が欲しくなる。翌朝、ハムエッグとトーストで簡単に食事をすませた後、私は、「舞踏会の手帖」をめくるような、ある種のときめきをおぼえながら、最初に電話する相手の名をノートでたしかめた。

〈工藤正明……遊撃手。昭和三十年から昭和三十四年まで在籍。住所・札幌市西区琴似町発寒九九七、茶木方〉

と、ある。

電話帳で調べると、同姓同名の人物が二人列記されていて一人は月寒東、一人は北四十条と、いずれも住所が異なっていた。私がメモしてきた住所は、十年ばかり以前に、巨人軍球団事務所に届けられたものらしい。工藤さんは巨人軍OBの会にも出席して来ない。失礼とは思ったが、私は、〝月寒東〟のほうのダイヤルをまわしてみた。

「あの、巨人軍にいらっしゃったことのある工藤さんでしょうか」

「え？　なに？」

と受話器のむこうで男の声がして、

「いや、ちがいますよ」

と切れた。誤魔化しているようなふうはない。ついで北四十条のほうに電話すると、奥さんらしき女性が、

「あ。ええ」

と愕いたふうにいって笑った。

「そうです」

「いらっしゃいますか」

「勤め先に電話なさってください」

工藤さんは、電電公社に勤めていた。すぐに電話すると、こだわりのない口調で、今夜、お会いしましょう、と言う。「たのしみにしています」と私は受話器を置いた。

夕刻まではかなりの時間がある。北海道にはほかに、〈・000〉の人が三名いた。そのうちの一人は、〈藤原利美・三塁手。昭和二十六年から二十七年、在巨人。住所・苫小牧市字糸井三四八の四、日軽金アパート5A二〇六一〉である。苫小牧の日軽金に電話を入れると、藤原さんは四年前に東京へ転勤していた。

ついで私は、〈黒田能弘・投手。昭和三十四年から昭和三十六年まで在籍。札幌市南区澄川一—四、第二祐荘内〉に連絡をつけようとした。調べてみると、この黒田さんも住所が変っている。

「は、はい。そうです。ただいま主人は、定山渓ゴルフ場の打ち上げ会に行っておりまして、今夜は

一泊してまいります」

と奥さんらしきひとの声が返ってきた。

いま一人は、〈土岐道雄・投手。昭和二十九年から三十四年まで在籍。茅部郡森町字三幸町渡島信用金庫〉とある。このひとも、調べると、渡島信用金庫の森町支店から八雲支店に異動していた。

「いやぁ、時間がないですね」

と、土岐さんは電話で答えた。森町、八雲町は、札幌から函館にいたる函館本線の長万部の南にある漁師町である。札幌からは急行でおよそ四時間、特急を利用しても三時間半はかかる。

「ここらは泊られるとこもありませんよ」

「仕事が忙しいんです。いや、夜も無理でしょう。九時、十時頃まで残業しますし、あくる日の出勤がありますから」

「日曜日も、ねぇ。予定があるんです。ええ、朝から夜中まで」

「土曜日も……時間がありませんねぇ」

あきらかに、土岐さんは、不意の無躾な訪問者を敬遠しているように思えた。私は、迷った。もう一度電話することにして、ひとまず受話器を置いた。それから夕刻までは、ホテルのレストランで男爵イモの旨いのをたっぷり食べたあと街をうろうろして過し、午後五時前になって約束通り工藤さんに電話を入れた。「駅前から真っ直ぐ歩いて拓銀本店のところを左に曲ってください。テレビ塔のほうへ歩いて行くと左側に中央電報局があります。その中電ビルの三階に、札幌データ電信施設所とい

うのがあります」工藤さんはそこまで言って、いや、私が中電ビルの裏口のところに立っていましょう、と考えを変えた。

その日は、前日にくらべると冷え込みが厳しかった。躰をすくめながら、教えられた道順をたどってゆくと、胡麻塩の頭を五分刈りにした中年の男が立っていた。元プロ野球の選手にしては背丈が低いが、躰はがっちりしており、四十一歳とは思えぬほど若々しい。

「どこへ、行きましょうか」

気さくな態度で、かれはさきに立って歩き始めた。地下街へ降りて行く足は、スポーツマンらしく、すこぶる早い。十分くらい歩いて案内されたところは、ススキノの恵愛ビル五階にある「北海しゃぶしゃぶ」という店であった。

「ここはマトンのしゃぶしゃぶを食べさせるめずらしい店です」

工藤さんは会員証のごときものを店員に見せてウィスキーのボトルを持ってこさせた。薄く切られたマトンは白い脂肪の部分と肉の部分とが微妙な色合いで、みるからに旨そうであった。交換した名刺には、データ電信施設所労務厚生課の係長という肩書が印刷されてある。

「難しい名称ですね」

「コンピューターのデータを考えるところですよ」

「労務、ですか」
「労務関係はスポーツマンだった人が多いです。組合との交渉で、徹夜騒ぎもありますから」
工藤さんは、係長という肩書にこだわりがあるようにみえた。しゃぶしゃぶの鍋の湯が沸騰し、互いにマトンの切れを泳がせながらウィスキーを飲むうちに、
「巨人軍にいたという事実は、いまも、人事にまで影響するんですよ」
と話し始めた。それは、この二十年間、胸のうちにつもった思いをいっきょに吐き出すようでもあった。
「なにかというと、言われるですね。挨拶ひとつにしても、そうです。こちらは悪気じゃなくて、ついうっかりしていたりすると、あいつジャイアンツにいたのを鼻にかけて生意気だ、などといわれる。いまも尾をひいて、ことあるごとにその経歴が持ち出される。昨年も、課長に泣いて説明したことがあります。飲んでいたところ、きみはむかしああだったから、とひょろっという。私は涙を流して、そんなことはない、まだわかってもらえないんですか。三十年前のことではありませんかとかき口説きましたよ。北海道から東映とか中日とか、ほかの球団から帰ってきた元プロ野球選手もいますが、かれらはなにもいわれない。あ、中日にいたの、そう、で終りです。しかし巨人軍となると、なに、ジャイアンツにいた？　となるんですね。巨人軍にいてちやほやされ、ヒーロー扱いにされたのだろう、と思われている。が、それもちがうんです。青春の一時期をあれほど一途に真面目に過した者はないのではないかと思っています。多摩川の寮生活は厳しくて、酒も禁じられていたし、外泊も許さ

れていなかった」

工藤さんは二十年振りに、胸の底にとどこおったものを話す機会を得て安堵したような顔つきであった。北海道に帰って以来、巨人軍についての話や、巨人軍に在籍したという事実は、できるだけ語らぬようにしてきたという。口を開けば誤解を生むばかりである。妻にも詳しいことは話していない。

工藤さんは北海道では名門として知られる北海高校の遊撃手であった。春と夏、連続して甲子園に出ている。当時（昭和二十九年）はいまほどスカウト活動はさかんではなかったが、敏捷な守備と強肩、好打者ぶりを買った野球評論家の吉田要氏が巨人軍からの使者として北海道までやってきた。入団しないか、といわれて工藤少年も米穀商の父親も否応はない。戦後になって北海道から巨人軍に誘われたのは二人目か三人目という栄誉である。契約金五十万円、年俸三万円の報酬額で巨人軍に入団した。『北海道から工藤選手巨人入り』と地元の新聞も興奮して書きたて、まさに鳴り物入りで工藤少年は新丸子の寮に入った。

当時の監督は水原円裕（茂）。コーチは谷口五郎。助監督兼二塁手・千葉茂、助監督兼一塁手・川上哲治、二軍監督・新田恭一、二軍コーチは内堀保、武宮敏明といった陣容であった。投手は別所毅彦、藤本英雄、中尾碩志などがいる。王も長島もまだ入団していない。外野手には与那嶺要、南村侑宏、加倉井実、岩本堯たちがいる。工藤少年が目ざすショートのポジションには名人とうたわれた広岡達朗（のちヤクルト監督）がいた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com